6　小倉処平と陸奥宗光

小倉処平と陸奥宗光は、小村寿太郎が世に出るにあたり大きな影響を与えた人物である。二人は安井息軒の同人であったのだが、入門時期も違い維新以前には面識もなかったと思われる。ところが、処平の実兄である長倉訒（当時は徳助）と陸奥は、訒が京都天満屋事件で陸奥が属する海援隊に襲われたという不思議な因縁があった。ただ、本人たちが相手方に居たことは、終生知らなかったであろう。

私は、小倉処平が陸奥の知遇を得たのは『明治過去帳（大植四郎編）』の記述から考察して、大蔵省七等出仕として在京した明治八年以後と考える。当時、星亨（政治家）・長谷川芳之助らと陸奥宗光麾下の「三幅対」と称されるほど付き合いがあったようである。陸奥と小倉は共に税制（註）に精通していたうえに、政治信条でも藩閥政治に強い不満を抱いていた。西南戦争で処平は戦死し、陸奥も同時期に計画した政府転覆の企てに連座して失職している。

その後、官界に復帰した陸奥は明治二十五年に外務大臣に就任し、不遇をかこっていた小村寿太郎を駐清公使館参事官に任命したのは、翌年のことであった。陸奥は小村に小倉処平について語り、前途を祝し励ましたという。清に赴いた寿太郎は、二十七年の日清戦争で実力をいかんなく発揮し、外交官として頭角を現したのである。

註　処平は政府の欧化政策には反対であったがヨーロッパに派遣されている間に「英国税年表」「英国地方条例」「支那水路誌」などを翻訳して、海外の新知識を紹介している（『小村寿太郎』黒木勇吉）

7　西南戦争に身を投じた小倉処平

明治十年、小倉処平は東京にあって西南戦争の勃発を知った。藩閥政治に不満を抱いていた処平は、さっそく帰郷して飫肥士族を率い西郷軍に身を投じようとした。しかし、九州までの道程は警戒が厳しく、通行が困難であった。そこで、伊藤博文を訪ねて「今から自分が日向に下り、民心を取り静めたいので戦地通行の便をとってほしい」と頼み、伊藤にその手配を施してもらった。これにより処平は難なく帰国することが出来たという。

また、律儀なことに、途中で伊藤に使いを出して、「自分の志は西郷隆盛とともに政府を改革することにある。私がどうして藩閥に牛耳られている政府の為に、犬馬の労を執るものか（力を尽くして働くものか）」と自分の本心を伝えている。伊藤は「悔やむのは、青二才にだまされる結果となってしまった・・・」と言ったという。

ただし、処平は直接九州に向ったのではなく、途中で京阪地方にしばらく滞在していたようである。大山綱良（鹿児島県令）が処平から聞いた話によると「処平は、京阪地方において有馬藤太らと周旋（同志を募る）していたところ、計画が発覚して有馬は捉えられてしまい、処平はようやくのがれて（飫肥へ）帰りついた」という。処平が伊藤博文に本心を明かしたのはこの時のことであろうと思われる。

有馬藤太は鹿児島士族で、同藩の伊地知正治（安井息軒の門人）の後輩であった。戊辰戦争では甲陽鎮撫隊（新撰組）を包囲し、近藤勇を護送したが、勇の処刑に反対したことでも知られる。その後、政府に出仕したが征韓論で下野していた。また、陸奥宗光が大江卓らと関西で秘かに反政府活動を計画していたのも同じ頃であった。

なお一説によると、処平が九州に下るにあたり、高島炭鉱の管理者であった大江卓に相談したところ、処平を炭鉱に関する用務をもって旅立たせたともいう。なお、大江卓は土佐藩閥の後藤象二郎の娘婿であり、処平の兄長倉訒は後藤とは幕末以来、旧知の仲であった。

処平は、飫肥に帰郷する前に鹿児島県に向かい県令・大山綱良に面会して「日向の兵を以って別働隊を編制して、大分から小倉方面に進出するよう」進言したが、大山は初対面である処平の策を受け入れなかった。失意のうちに飫肥に着いた処平は体調を崩し出兵が遅れる結果になり、参戦した時には西郷軍は防戦一方となっていた。戦いの後半に大分方面に進出したが、時すでに遅く八月に北川（延岡市北川町）で戦死を遂げた。

当時、二十三歳の小村寿太郎は、アメリカに留学中であった。どの様な思いでこの事件を聞いたことであろう。それ以前、学窓の友にこの内乱を予言していたという寿太郎。もし、日本に寿太郎が居たならば、恩師の処平と共に、この戦いに加わったことであろう。乱後、寿太郎は「少なくも、日本の最も良き血を失へる悲惨の出来事」と嘆息したと、枡本卯平が『自然の人小村寿太郎』に記している。

三　雲井龍雄と飫肥藩の政治動向

幕末期、京都における飫肥藩の政治動向を考察するにあたり、どうしても米沢藩士・雲井龍雄に関する史料を見逃すことができないと思う。そこで、次に雲井龍雄の動向を通して飫肥藩の政治動向を紹介する。

1　雲井龍雄（一八四四～一八七〇）の略伝

米沢（上杉家十五万石・山形県）藩士。本名小島龍三郎、雲井龍雄は変名。飫肥藩出身の儒学者安井息軒に学んだ。幕末から明治元年にかけて飫肥藩士甲村休五（後の平与市）や長倉徳助（小倉処平の実兄・後の長倉訒）らと薩摩閥の勢力伸張に抵抗するとともに、明治政府の東征を阻止しようとした。一時は米沢藩の貢士として、飫肥藩貢士の稲津済らと共に明治政府に出仕したが、官を辞して不平士族たちを扶養した。これが内乱を企てたとして明治三年に逮捕され斬首された。享年二十七（『雲井龍雄全傳』『角川日本史辞典』など）。

2　雲井龍雄の出身、米沢藩について

飫肥藩士と親交が深かった雲井龍雄を語る前に、その出身藩である米沢藩について触れておこう。米沢藩は、戦国の雄上杉謙信の養子上杉景勝を藩祖とする東北の雄藩である。また、日向国（宮崎県）高鍋藩秋月家から養子に入り、藩政改革を行った上杉鷹山が有名で、宮崎県民にも馴染み深い。戊辰戦争においては、新政府と会津藩の和解を斡旋する立場をとろうとしたが、新政府に拒否され会津藩とともに奥羽列藩同盟の中核となり政府軍と戦い敗れた。

『雲井龍雄全伝』（安藤英男著）によれば、幕末において攘夷論が盛んな長州藩と米沢藩の間は親密で、この結びつきに活躍した一人が雲井龍雄の学問の師であった中川雪堂であったという。

雲井龍雄が幕末維新に活躍する背景を理解するために、文久年間の米沢藩の動向について解説しておこう。攘夷派を力で弾圧した大老井伊直弼が桜田門外に倒れると、攘夷熱が高まり、京都を中心に長州藩（攘夷派）や薩摩藩（公武合体派）の間で、政局の主導権をめぐる権力闘争がくりひろげられた。幕府は文久二年（一八六二）に会津藩を京都守護職に任命して治安にあたらせたが、長州派公家（攘夷派）の三条実美らによって御新兵が置かれ米沢藩・紀州藩・豊前中津藩が任命された。これを受けて文久三年二月、上杉斉憲が兵一千人を率いて上洛、八月頃には長州派の勢いは頂点に達した。ところが、公武合体派の薩摩藩が会津藩と同盟を結び「八月十八日の政変」を起こし、三条実美ら長州派（攘夷派）七卿を京都から追放、朝廷内に長州排斥の声が満ちた。米沢藩は三条実美らの弁明を行ったが採用されず、上杉斉憲は九月二十二日に兵四〇〇人を率いて京都を去っている。この間の経緯は、雲井龍雄らに、策謀の多い

薩摩藩に対して根強い不信感を植え付けたという。

3　雲井龍雄と飫肥藩

雲井龍雄が藩邸詰として、江戸へ出て来たのは慶応元年（一八六五）閏五月のことだった。向学心旺盛な雲井は、さっそく評判が高かった安井息軒の三計塾に入門している。在籍期間は短かったが息軒は雲井の才能を愛し、雲井も息軒を終生師として仰いだ。帰藩した雲井は米沢藩内で認められる存在となり、慶応三年一月頃には、米沢藩の探索方として京都に上り、三計塾の門人や藩主上杉家と姻戚である土佐藩を中心に情報の収集にあたった。時は明治維新の前年、京都では倒幕派・佐幕派の政治抗争が続き、不穏な政情下にあった。

この頃、雲井は飫肥藩士甲村休五（平与一）・長倉徳助（小倉処平の兄・後の訒）らと頻繁に会合している。雲井らは薩摩・長州の武力による政権奪取を回避し、土佐藩による「公議政体論」が平和裏に実現することを期待していたようである。「公議政体論」は、坂本龍馬らが提唱した政治構想で、土佐の後藤象二郎が山内容堂（前土佐藩主）を動かして、慶応三年十月十四日に将軍徳川慶喜に政権を朝廷に返上（大政奉還）させた。

ところが、あくまでも倒幕を実効しようとする岩倉具視・西郷隆盛・大久保利通・木戸孝充らは、即座に反撃に出て、土佐藩の公議政体論を覆すべく、十二月九日に王政復古の大号令を発令し、旧幕府勢力を政権構想から排除することを目指した。翌慶応四年（明治元年一八六八）一月の鳥羽・伏見の戦いで政府軍が勝利をおさめると、新政府は政治体制を整えるため諸藩から有能な人材を貢士として出仕させた。雲井龍雄は米沢藩の貢士に任命され、飫肥藩からは稲津済が貢士となっている。貢士は、各藩から藩の規模によって三名から一名ずつ出されたが、貢士たちはそれぞれ出身藩の思惑を抱いており、米沢藩や飫肥藩のように佐幕的で旧幕府勢力の温存を図り薩摩藩を敵視する藩もあって、まとまりに欠けた。

『雲井龍雄全伝』によると、長州・土佐・肥後のなかにも反薩感情を抱く者も多くあったようである。雲井はこれら長州・土佐・肥後の一部と提携して、政府軍による東征（武力による徳川勢力の討征）を阻止しようと画策（平与市の伝を参照）していたようで、この頃の交流者には次のような者たちがいた。文字の右横に線がある者は三計塾出身者。

土佐　後藤象二郎・伴修吉・村田覚亮・武市八十衛
長州　広沢真臣・品川弥二郎・林半七・河野英之助・毛利内匠
肥後　佐幕派の岡松辰吾・田尻彦太郎・大津山譲介（中村六蔵）

しかし、三月から四月にかけて状況は雲井にとっていっそう不利になっていく。三月には頼みの熊本藩が、同藩内の親薩摩派によって藩論を統一されてしまった。さらに三月二十一日、雲井は後藤象二郎から、土佐藩による東征の回避は絶望的であることを知らされた。その上、四月十一日・同十八日の会談で雲井は後藤象二郎と袂を分かち、土佐藩とのつながりが断たれてしまった。しかも、閏四月十九日には、雲井の米沢藩にも会津討伐の密勅がもたらされ、雲井の他藩と連携した会津討伐回避の努力も徒労に終わった。以後、雲井は奥州列藩を連合させることで政府に圧力をかけ、寛大な処置を引き出そうと模索した。

五月一日、雲井龍雄は政府に征東に反対する三度目の意見書を出すと、京都の真葛軒で飫肥の甲村休五・稲津済・長倉徳助・仙台藩の後藤庄左衛門・大津山譲介（明治に入り哲学者となる）と会い、翌々日、江戸へ下った。これが雲井と甲村・長倉との最後の別れとなった。その後の活動については稲津済の伝記を参照。